



特別支援教育における魅力ある授業づくり実践編

知的障害特別支援学校における生活単元学習の指導 —「伝え合う力」を重視し、コミュニケーション力を伸ばす劇活動の実践—

実践のポイント

- 児童が楽しみにしている学習発表会に向けて、「大好きなお話の劇をやろう」とお話選びから、役割、せりふや道具作りなど、児童たちが考え、主体的に取り組んだ実践です。
- 自閉的傾向のAさんの目標と達成に向けた指導・支援に焦点を当てた事例です。

授業実践

単元名「見て！聞いて！ぼくたちのげき『おおきなだいこん』」

単元設定の理由

絵本の好きな4年生は国語の時間に「おおきなだいこん」（こくご☆☆文部科学省）のお話をみんなで読みました。何度も出てくる「うんとこしょ、どっこいしょ」のせりふが大好きです。「学習発表会があるよ。何の劇を発表するか、みんなで考えよう」という担任の投げ掛けにリーダー格のBくんが真っ先に「おおきなだいこん」と発言、「だってみんなが大好きなお話だし、みんなが主役だよ！」この一言で決定！実は担任はこうなることを予測し、事前にBくんと少し打ち合わせていたのです。

単元目標

- 自分の役割が分かって劇の練習や準備に進んで取り組む。（意欲・関心・態度）
- 友達の役割も分かって、せりふや動きのやりとりをしたり教え合ったりする。（集団参加・コミュニケーション）
- お話のストーリーやせりふの意味が分かり劇を楽しんだり、必要なお面や小道具などを制作したりする。（知識・技能）

Aさんの指導目標

Aさんは、決められた場での返事やあいさつはできますが、友達と関わって遊ぶことや友達との会話のやりとりは苦手です。そこで、この劇では、たぬき役の友達から誘われ、みんなと同じ動作とせりふを言い、ねこ役の友達を呼んで関わるという繰り返しが多い真ん中の犬役を担ってほしいと担任は願い、Aさんに勧めました。そして、Aさんの目標を次のように設定しました。

- 教師や友達と、見聞きしたことや気持ちなどを簡単な言葉で話し合う。
- 自分の役が分かり、友達と一緒に簡単なせりふのある劇をする。
- 劇に必要な道具を作る活動で自分の役割や仕事が分かり、最後まで取り組む。

児童の気持ちを引き出し、高める指導計画

- 「おおきなだいこん」のお話、紙芝居にしたよ。みんなで読んで、思い出そう！
↓「うんとこしょ、どっこいしょ！ぬけないなあ」（この繰り返しのせりふに興味を示すAさん）
- 「楽しいね。役を決めて劇遊びをしよう！」
「ぼくはたぬきをやるよ」「私はねずみさん」
「ぼく(B)はおじいさんをやるよ」「ぼく、ねこ」
教師「Aさんは？何の役になりたい？」A「…」
教師「犬さんの役、やってみる？」A「うん」
↓
- 「練習して、発表しよう！」「お面や道具を作ろう」「みんなが言えるよう、せりふを考えよう！」
・Aさんの動作とせりふ…(たぬき役の友達に誘われ、登場する)「分かった。ぼくも手伝うよ。(おじいさん、たぬきと一緒に引っ張る)そーれ、うんとこしょ、どっこいしょ！(一緒に)うーん、ぬけないなあ！ねこさん、一緒に手伝って！」
↓（友達との練習を繰り返す。）
- 「上手になったね。歌も入れようか。」「動物が登場するときの音楽と踊りも考えよう！」
↓（*Bくんを中心に劇への気持ちを高めます。）



指導の経過とAさんの様子

- せりふを覚える段階では、抑揚がなく、棒読みで声も小さかったが、練習を繰り返すうちに、同じせりふを言う友達の声や表情、動作を真似ようとする様子が見られてきた。犬の前に出るたぬき役には、上手に表現できる児童を担当させた。「真似ができる」ことも担任はAさんにねらっていた。
- 次のねこを呼ぶせりふを忘れがちであったが、ねこ役の友達が「(私を)呼んで、呼んで」とAさんに教えてあげ、それを受けてせりふを思い出し、言えるようになっていった。児童同士の関わりも担任の意図するところであった。
- 友達に誘われて動く、一緒に活動する、友達を誘うなどの活動が必然的に行われる劇は、やりとりの力を伸ばすのに効果的である。Aさんは、次第に抑揚を付け、大きな声で自信をもってせりふを言えるようになり、楽しそうな表情で練習に取り組むようになった。
- 学習発表会当日は、堂々と役の演技をするAさんに、そんな姿をこれまで見たことのない両親や祖父母が感動して涙を流していた。友達と一緒に劇に参加できていること、きちんと自分のせりふを一人で言えたこと、役割を理解して行動できていることに大きな成長を見取っていた。Aさんはその後日常生活でも教師や友達と簡単な会話のやりとりができるようになっていった。

- 「だいこんを引っ張る動作ももっと大きく、かっこよくみんなでそろえようか。」
↓
- 「よーし、小学部のみんなにみてもらおう！」
「やったね。大きな拍手をもらったよ。」
↓ (A「できるようになった！うれしいな」)
- 「いよいよ、明日はお父さん、お母さん、お客さんに見てもらおうよ。楽しみだね。」
↓
- 「本番だ！どきどきするなあ。でもせりふも動きも歌もばっちりだから、大丈夫だよ。みんな、頑張ろうね」
↓ (*みんなで成就感・達成感を共有します。)
- 「やったあー！とっても上手だった、かっこよかったって褒められたよ。」「楽しかったね。ビデオを見たいな。」「またみんなで劇をやりたいね!」「やろう！やろう！」

指導と評価の一体化そして児童同士の学び合いを大切に

単元設定は、その時期、児童が気持ちを高ぶらせ、夢中で取り組む学校生活のテーマとなります。単元目標から下ろした一時間、一時間の授業で、個々の様子をとらえながら、気持ちがテーマに向かって高まっているかどうかの評価をします。本単元では、児童の興味・関心のある大好きなお話を題材にして、役割意識やコミュニケーション力を育てやすい劇活動を実践しました。単元展開の過程では、さらにリーダー性を伸ばしたいBくんを中心に「児童たちで決める」経験を積みせようと、事前にBくんと相談したり、Aさんに個別指導をしたりして、担任の意図が展開に反映するよう配慮しました。また、個々の目標の妥当性を評価し、より高く、広くすることに配慮し、「この目標でいける」と決め、達成のための手立てを考え、講じます。担任は、劇に向かって主体的に活動しているクラスの児童集団を見て、その雰囲気によってAさんが犬役でしっかり劇に参加できると確信しました。まさに集団の力です。Aさんがせりふが分かりやすいよう視覚的な手掛かりを用意し、上手に言えたときは必ず褒めて「それでよい」ことを伝えました。練習では、児童同士の教え合い、学び合いを大事にし、教師の働き掛け方を研究しました。道具作りではAさんの得意な紙貼りを生かし友達と一緒に大根の制作を担当し、何を作るかが分かって最後まで取り組みました。

自己肯定感と生活への意欲を

児童が目当てと見通しのもてる生活に主体的に取り組み、成し遂げて大きな達成感を得ることで自信と意欲が高まります。スキルとともに自分のよさを学ぶことが生活単元学習です。